ローマ人への手紙
パウロの手紙の中でも長く重要な手紙のひとつです
当初パウロはタルソのサウロと呼ばれていました
彼はユダヤ人のラビでパリサイ派に属していて
モーセの律法やユダヤ人のしきたりと
伝統を非常に大切にしていました
そんな彼から見るとイエスと彼を信じる者たちは脅威でした
しかし彼は復活のイエスと衝撃的な出会いを果たし
イエスの公認の弟子である使徒に任命され
聖書では異邦人と呼ばれるユダヤ人ではない人たちに遣わされました
それからローマの名前のパウロを名乗り
よみがえられた王であるイエスを宣べ伝えながら
ローマ帝国の領内を行き巡りました
そしてイエスを信じた人たちと教会と呼ばれる共同体を幾つも作りました
後にパウロは彼らの信仰を育てるため
また質問に答えるためにこれらの教会に宛てて手紙を書いたのです
ローマ人への手紙もその一つでありパウロの晩年に書かれたものです
使徒の働きを読むとローマの教会が以前から存在していて
ユダヤ人と非ユダヤ人のクリスチャンの両方がいたことがわかります
しかしローマ皇帝のクラウディウスが
ローマにいるすべてのユダヤ人を追放しました
5 年後ユダヤ人はやっとローマに帰ることを許されましたが
その中にはイエスを信じるユダヤ人も含まれていました
ところがローマの教会に戻るとその習慣やしきたりが変わっていて
教会は非ユダヤ的なものになっていました
これが信徒の中で緊張関係を生み出し
やがて教会は分裂してしまいました
彼らはイエスをどのように信じ従うべきか
また非ユダヤ人の信徒は安息日を守り律法の食事規定を守り
割礼を受けるべきかなどの点で意見が分かれていたのです
ですからパウロは明確な目的をもってこの手紙を書きました
彼はこの分裂した教会が一致することを願っていましたが
これには更なる目的がありました
それはこの教会を拠点として更に西へ宣教の旅を続け
やがてスペインまで行くことでした
そういうわけでパウロはこの手紙において

イエスの生涯死復活の良い知らせである
福音の最も包括的な説明を記しているのです
この手紙には 4 つの大きなセクションがありますが
これらはすべて繋がっていて福音について深く掘り下げています
福音はまず神の義を現わすのだとパウロは言います
そして福音は人を全く新しく造り変え
それによって神のイスラエルへの約束を果たします
またこの福音こそが教会を一致させるのです
このビデオでは 1 章から 4 章を紹介します
パウロは冒頭で自分のことをイエスについての福音を伝えるよう
神によって召された使徒だと紹介しています
イエスはイスラエルのメシアであり
よみがえられた神の子であり全世界の王であり
その愛による支配に従うよう人々を招いていると説明します
またパウロはこの良い知らせは信頼する人を救う神の力であり
神の義を現わすと言います
義という言葉は旧約聖書の中で深い意味を持つ言葉です
この言葉はまず神はいつでも正しくて
正義を行うという性質を現わしています
さらに神は誠実であり必ず約束を守ることを意味しています
イエスのストーリーを通して神はこの両方を果たしたと
パウロは説明しますどういうことでしょう
ここでパウロは自分の言葉で創世記 3 章から 11 章を振り返ります
異邦人の国々は罪と自己中心に捕らわれていて
逃げ出すことができず人の心も考えも腐敗していて
神に背き偶像礼拝にのめり込んでいます
偶像礼拝とは神ではない造られたものに人生の目的を求め
それに身を捧げることです
これは私たちの人間性を歪め破壊的な行動に走らせます
結果正義の裁判官である神の前では
人間は有罪であると言わざるを得ません
これに対してユダヤ人はこう言うかもしれません
この様な国々の中から神が私たちを選び出してくれて良かった
エジプトでの奴隷状態から救い出されて
トーラーを通して安息日や食事規定や割礼の律法が与えられ
神の聖なる民として相応しい生き方が示されているから

しかしパウロは待ったをかけます
トーラーとその続きのストーリーを振り返ると
イスラエルは異邦人と変わらないくらい
罪と偶像礼拝にまみれていました
イスラエルはトーラーを持っていたので
その罪は更に重いのだとパウロは訴えます
つまり異邦人であれイスラエル人であれ
全人類は罪にからめとられていて
神の前で有罪であるとパウロは結論付けているのです
しかしこの状況に対しての神の応答こそが福音です
人間を罪に定める代わりにイエスはイスラエルのメシアとして来て
罪の犠牲としてすべての人の代わりに死にました
全人類の代表者として私たちがもたらした罪による苦しみと
死の受けるべき結果をイエスが代わりに負いました
そして死からよみがえってこれらすべてに打ち勝ちました
このよみがえりの命を得る道をイエスは開いてくださったのです
イエスが私たちのようになってくださったことによって
私たちはイエスのようになれるのです
このすべてを通して
神はイエスを信頼する人を義と認めるとパウロは説明します
義認もまた旧約聖書に深いルーツをもつ言葉であり
神の義と関係あります義と認めるとは
まずイエスが私たちのためにしてくださったことを通して
私たちはまず新しい状態になるということです
つまり神の前に罪がある状態から神との関係が回復し
赦された状態になります
また新しい家族が与えられ神の契約の民の一員とされます
さらに新しい未来が与えられますが
それは神の恵みによって人生が変わり続ける歩みが
始まるということです
これらの義認の恵みは
イエスへの信仰を通してキリストにある者に与えられます
これらを踏まえて
次にパウロは誰が神の契約の民に入れるかという
重要な問題を取り上げます
ここでパウロは創世記 15 章のアブラハムの話に触れます

イスラエルにトーラーの律法が与えられるはるか前に
アブラハムは神の前で義と認められましたがどうしてでしょう
神はアブラハムが祝福されたあらゆる民族からなる
家族の父になると約束しました
しかしアブラハムと妻のサラは年を取っていて
一度も子どもを授かっていませんでした
それでもアブラハムは神の約束を大胆に信じました
そして神はアブラハムを義と認めると宣言しました
こうしてアブラハムは神の契約の民の父となり
この民は急速に拡大しましたが
そこにはユダヤ人も異邦人も含まれています
この民はアブラハムへの約束を成就した方に対して
信仰と信頼をもっている者たちであり
その方とはメシアなるイエスです
この手紙の後半の土台になる
パウロの１章から４章までの考えを振り返りましょう
全人類は罪にからめとられ救い出される必要がある
トーラーの律法を守ることを通して人は自分を救うことはできない
神はその義のゆえにイエスの死と復活を通して
世界を罪から救い出した
こうして神は信仰に基づくアブラハムの
あらゆる民族からなる家族を作りご自身の契約の民としました
この後パウロはこの新しい家族が神の壮大な計画の一部であり
彼らは新しい生き方に召されていると説明しますが
そのすべての根源はローマ人への手紙の１章から４章にあります

【要約】

「ローマ人への手紙」はパウロによる重要な手紙で、イエスの福音を伝える内容が中心です。パウロはユダヤ教のラビでしたが、イエスに出会い、使徒として異邦人へ伝道しました。ローマ教会は異邦人とユダヤ人の信者で構成され、一致せず分裂していました。パウロの目的は一致を取り戻し、さらに西へ宣教に進むことでした。手紙の中で、イエスの死と復活によって罪から救われる方法と、信仰によって義認められることを説明します。アブラハムの信仰を通じて異邦人も神の契約の民となり、新しい家族を形成すると説明されています。これらの考えは、手紙の中で詳細に探求され、パウロの 1 章から 4 章のアイデアに根ざしています。